

# 人生の 仕舞い方



よりこ  
武藤頼胡の

広島に原爆が投下された翌日、母の命日です。亡くなってもう11年がたちました。36歳になっていた娘である私が一番困ったことは、母が亡くなって、すぐにどんなことをしたらいいのか分からなかったことです。葬儀などへの第一歩が分からなかったのです。

「葬儀屋さんは、電話すればすぐに来てくれるのか」

## 葬儀への第一歩

## 最期 積極的に学んで

「来てもらったらどんなことをお願いするのか」

ここに関していかに無知であったかを、思い知らされました。でも、きつとこんなものです。40歳前の経験もない娘は。

では何が必要なのでしょうか。一つは、この大切な分野



を縁起でもないからといって話さないままにせず、学べる社会にすることです。これは今まさに、私に取り組んでいくことです。

次に、私たちも積極的に「知る」ことです。日蓮上人がこんなことを言っています。「まず臨終のことを習うて、のちに他事を習うべし」。どんな人でも死は避けられません。では、どんな最期を迎えればいいのか。ここは向き合いたくないけれど、大事なことです。

私は母の死を通して体感し、大事なことだと思いまし

た。ここを学ぶからこそ、生きることがどれだけ大切なことなのか、「いのち」を輝かせる一歩ではないのかなと思うのです。

それは、親から子に継承していく事項です。そのためにも親である私が、まずは子どもの生きる手本として、自分の死への手だてをしています。

母の命日は、そんなことを強く感じられた一日でもありました。お母さん、ありがとう。

(終活カウンセラー協会代

表理事)

(次回は28日付)